
ダゲンブongo。

白紙描写

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダゲンブング。

【Nコード】
N6881Y

【作者名】
白紙描写

【あらすじ】
暇度を最大限に生かした…中途半端な作品を連ねた物です。

ダゲンフンゴ。

飽きてしまったのは、ぼくの所為ではないから…。他人の所為だから。

「もう何もかも飽きてしまつて、遣ること無いな」

空気を吸って吐くことだけは、一人前に飽きないのだが…

それを、ハイソレ飽きたと投げ出し止めること出来るはずがない。弱虫毛虫な自分しかそこには居ないから。

…こんな体験をした…

一度やり初めて、手に入れた、スキルも飽きてしまえば、活用する機会も遠のき、得た物は衰える。

手に入れても時間で朽ちる。その時、諭された一言。

諦め投げ出し飽きる。壁が在れば乗り越えず、砕かず、遠回り。

人生なんて語っちゃいけないのか…遠巻きにいつて、退屈しのぎの茶番を開いて、楽しみ、のちにお開き。

生き甲斐を見つけてしまえば良い物の末練が邪魔をして、全身全霊を尽くせない。

「友達でも呼ぶか…」

敷かれた畳の上で飢えた蛙のようなぼくは、お友達を呼ぶことにした。

仰向けになり、大の字で盛大とスペースをとる僕は、頭上に存在し得る形態電話を手にとった。

プチ

ぼち

貧弱そうな効果音と高らかに、聞こえさえ渡るキー音。

履歴から『友達B』と見て取れる表記カーソルを移動させ、コール。

ピリリリ

ピリリリ

…

耳元に小型スピーカーが埋め込まれて要るであろう箇所当てると聞こえた。

数秒程か、あいつも暇を待て余しているのか、直ぐに相手の音声が届いた。

『はい、何だ。於川かどうした？今日も暇の同視か？』

於川とは、ヨリカワで僕の名前。親が携えた真名だ。其れ意外の名前は、あだ名。

同視とは、同士…つまり、彼も暇なのであろう。

「ああ、暇だ。取り敢えず来てくれ、」

ぷつ。

必要最低限のことはいったし、あれだけ言えば、言われるままに来てくれるだろう。

なんせ、あちら側も暇だとか言ってるし。

さて、此処から本題だな。

何して遊ぶかがこんにち重大な役目だ。下手すれば、相手も三十分帰ってしまい…たださえ、あちら側から来ていらっしやるのに、迷惑ではないか。

迷惑と言う表現は、そのくらいの意味合いに値するって事を意味していて、表現技法が可笑しい訳ではない。

「あ、そうだ。部屋でも綺麗にするか、」

何もない部屋は、只でさえ、何もないのに…只でさえ、物々しくなり余地がないのに掃除するのも、この世の末だな。

哀れとでも言いたいのか、掃除機だけは部屋の隅に、整理されている。

今週何度目の掃除だろう？

覚えて居るはずもない。歯を磨くのだって、食べ物をお口にした直後から三分以内に磨いているし…其れ同等に、人一倍数が多い。

覚えて居るはずがない。

別に綺麗好きとか、潔癖症との類に分類される訳でもなく、ただ単に暇だからとか、遣ることがないから…の理由から動機は来ている。まあ。僕のレベルに成ると、同じ様なものだけど、ね。

逆に例えれば、これが今の僕のあり方で。すぐ飽きてしまう症の僕からしてみれば凄く立派、世間体からも無害なよろしいこと…。

けど、虚しさが後のせでかさばり積もっていく、心のどこかで…。

「今日は面白そうな番組遣っているかな」

近代化の進むこの国で、ハイクオリティー過ぎる番組の連鎖で見る人を混沌へと引きずる込むテレビの中の人達は、今日も元気に何かを遣っているのだらう、と。

基本、テレビに映る番組表しか見ない僕だが、今日はテレビの音を聞きながら、掃除をすか。

興味本意とはまた別の好奇心を乗せ、一階のリビングまで降りて観る。

「リモコン。リモコン」

友達だって、汗だくなせつかち野郎ではないため、気長にゆったりと歩いてくるのだらうな…。

廊下、誰もいなく。何もない、玄関ドアが見えるだけ…。

は、リモコン。

於川は、ヨリカワは、瞬く間にリモコンを探せない。

「何処に置いたんだ。親め。」

基本。親とは、顔を殆ど合わない。

両親は今。仕事中。

探し巡る…

お、いい感じ。

「見つけたぞ。」

地デジ対応中だから、複雑なボタンがごろりだ。

どれが電源か。…なんて、誰でもわかりはするものの最低限の操作
しかできない。

これが現代社会を居るおれの最大限だ。

ダゲンフンゴ。 2

ひとまず、テレビに電源をつける。

何かに没頭するに当たって、命を削るような感覚に捕らわれてしま
い。それが思考、容姿まで行き渡るから恐ろしいことだ。

その所為在って今の僕は、とても燃え尽き灰のような感じ。

明日地球が滅びようとも僕はそのまま。維持し続ける。明後日に僕
が死のうとも、誰も気づきはしないし、悲しみもしない。
器用にそう生きてきた。

テレビに映る人達は、威力が在って、淡水魚の様に活発。

所詮なんて言葉が何処でも使えように、所詮、人間なんて。高が
知れてて、所詮、僕だって何だって出来るわけではない。

リモコンでテレビを点けるだけの得しかできなくて、今から掃除を
することしか、有すれない。

「音量を三桁まで上げるとしよう。」

このテレビ、音がかすんでよく聞こえない、から。ボリュームを上
げる。

何、隣近所迷惑が及ぶ筈がない。だって、防音機能に特化した。特
別なコンクリートを壁にまたいで被さっている。その所為余って、

何もしなければ、何も聞こえない。自分の心臓の音しか聞こえないのかも知れない。

「諦めて死のうか？」

まだ早い。やり残してきた物は、何一つだって無いが今はまだ…

大音量のリビングから少し離れた自分の部屋まで、歩く。

音は段々だが遠ざかるような感じ。他愛も無い討論会の音も高らかに僕聞き取る。

大丈夫だ。と自分に言い聞かせ、今日を乗り切る覚悟。

僕はいつもの部屋で、掃除機をかけた。

スゴ

ズズ

図図と聞き取る僕の脳みそ。

今日の滑り出しは最高潮。波に乗った気分だ。ノリノリな於川は、住居の騒音迷惑を自負して、掃除機の吸い込み音を下げる。

何か、形に名るものでも残して、この世を去りたい。

→その願いだけでも贅沢。

図図ガッ

どうやら、何か、掃除機のノズルに誤挿入した様だ。詰まって何も吸えやしない。

常識人。死ねと言えば死ねる人。

それが僕の脳内履き違い文書に刻まれた一説。ふと、思い出しただけだ。意味はない。

於川は、詰まって居る何かを窺める。

意味の無い文役を整えるより、よっぽど増な物がカカズっている事に気がつく。

処でだ。友達について話して観よう。

属に言う友達とは、ちゃんとした名前があり、友達という名前ではない。ちゃんとした個性だって備え付けである、薄型の電化製品に目がない。

あ、そうだな、彼の名前を薄型と呼ぼう。名前なんて長ったらしいから、あだ名で呼ぶが一番だ。呼ばれるのは除外だけど。

「ああ、これが引つかかっていたのか…」

於川は、詰まっているブツを取り出した。掃除機にとって、そのブツは異物や汚物。僕は優しくない生き物だが生き物ではない物には優しいのだ。

サイコロのような模様をしたトランプ質のカードの束が右手にあった。

恐らく、カードの束は輪ゴムで束ねていたらしく、今は溶けてカードに蔓延る始末。

老体なゴムは、カピカピに干からびていて、いかに歪か解る。独特香りも楽しめる。

「懐かしいな。これ、よくあるあれだよな」

暗黙の了解を経て、遮断される語彙。

ダゲンブongo。 3

「昔よくハヤったなー。」

昔は、そう昔は、ガキの頃と古臭く言うか、子供の頃と懐かしんで言うべきなのか…

要するに、カードゲームだ。無邪気で邪気の無い無垢な人格の時によくやった暇つぶし、今は、遠い昔の別人な俺が使っていた玩具。

「ユニークなものだな」

ペラペラと、溶け出し付着し痕跡を残すゴムを無造作に取っ払い。中身を拝見しての感想。

著しく興味なさすぎる回答論。健在する僕とは違って、子供なら観るだけでゾクゾクしただろうに…。

何だか、損した気分になる。

多分、昔っから俺は短才でただの子供だったのだろう。カードゲームを仕出かす僕、僕の友達もつられて遣っていた…いやはや、違うな僕が、自分自身がつられて影響を受けた。

流され安いのではない。流れを変える気力や発想力が皆無だったのだろう。

おっと、着目する場所が間違っている。要するに即ち、昔はちゃんと楽しんでたってことだけ、解れば充分だろよ。

カードの束を机の上に置き、掃除を続けるべく、自身に促しを駆ける。

「この行事もやれば大概は、楽しめる物だ。」

遣りだしは滑らか、その遣りだしに乗るのが困難。後は自然と飽きてしまう。

掃除だって、ずっと出来るわけではない。持続する許容も限度があり、それは意識しなくとも抑止力が架かり、抑制される。

永遠に、永久に、物事を繰り返し反復出来るわけではない。出来たとしても、僕には当てはまらない。もし、そのような人間が居たのなら、それは人類が生み出した最終兵器だ。

崇められるのは、人ではない。物でもない。者ですらない。崇め称えられる代物は、仮想世界の民。

ズズ -

吸引を繰り返し反復するのは、掃除機の方で、有機物じゃ無い方の無機質とも言えよう。

溶かせば、要領が解る。素材だって、明らか…生き物じゃない方は、苦しみを知らない。

「掃除機、お前は、幸せそうで良いよな。寿命もまだまだ、残量いっぱいいっぱいって感じで…。…なんと、云えばいいのか…愛もなくて、良いよな。」

寿命が尽きれば、粗大ゴミ。人は、物には『便利』の二文字しか象徴しない。

だって、人工に、楽をしたいから作った。それだけの理由で在るのだから、名前すら、正式名称で呼んでくれない、掃除機はどの掃除機とも共通だから…

綺麗にするのなら、何でも、綺麗にしてくれるのなら、少しばかりの人間。少数の人達の心を綺麗にしてあげたい。

そして、少しばかり汚らしい、汚らしい世界を美しくしたい…

「馬鹿な考えだ。自分すら腐った人間の方に針は傾いていると言うのに…」

あだ名、『薄型』が来たら、まず始めに、掃除機で煩惱を吸い上げてやろう。その後、次から次へと…買い込む音楽観賞用形態機器をもう少し、丁寧にして、貴重に扱うよう促そう。

そう、薄型が何に対しても薄く薄暗い様に…

ピリピリ

ピリ

電話だ。

的確正確には、携帯のスピーカーから着信音が発生しているだな。

今日初めての携帯電話の呼び出し。

何時もなら、メールすら来ないし、迷惑メールばかりだ。因みに、友達からの迷惑しか来ない。

ネット環境が整っていない。携帯なのでそんなもんだ。

「はい？なんだ？」

僕は、基本真面目キャラを象っている為、そのような口調をイメージしてくれ。

於川は、苗字と勘違いされるほど、名前とは言え無い名前だ。親が『方人二111』と書かれた紙屑を拾ったことから始まりらしい。

話がズレましたね。

於川は、手慣れた足さばきで畳に無規則に配置された携帯電話を親指で斜めっているホツチキスを空挟みして、畳まれた針のような模様のマークが表記されたボタンを押しながら、応えた。

『今。家の前』

プチ

対応無しに、状況だけ訊いて、横になったホツチキスを空挟みして、畳まれた針のようなマークが表記されたボタンを押す。

そして、玄関に向かう。於川。

素晴らし過ぎる、青空

鉄腸のおれは、そう気安く信念を怠けたりさせない。

善美とは、美しいこと。けれども、それは同時に俺の名前でもある、。

沢一 善美。

偽名だけれど、これが俺の名前でなければならない。

なぜなら、それはこの世の生き方に関しての在り方と該当する。

自分の立場は、承諾している。

自分は、派遣された公務員と名のふられた高校生だからだ。

「今日もまた、新しい空気が吸えそうだ。」

学校という施設があり、そまでの道のりがまた長い。

歩道と名が知れる公道は、ありとあらゆる所に空き缶やガムや雑草が散りばめられている。

この時代になると、これもまた芸術の範疇。良い感じだ。

空を観れば、空は青い。

雲が漂う空はまた一層青色。

歩き続けて歩き疲れた感じだな。

ちよっこら、休むか。

善美は、なんだか物足りない和菓子屋のベンチに腰掛けた。

空がここで青いから、意外と落ち着く。

喉から透き通る空気に、息を吐き出した。涼しむと言うより、和むといった方がいい感じ。

「事件が曖昧で、ダルいからたちが悪い。」

事件とは、おれが派遣された理由であり、派遣された理由だ。

生きる理由とも言っても良い。

いい感じに、生きてきたのは、事件を解決するためでそれ以外は何もない。

「いや、在るな。」

在るのは、コンビニで買ったガム。ガムを噛むのは繰り返す作業で無感情捕らわれるから…

平然とガムを噛む。

の前に、棒状の袋紙から四角いガムを取り出す。

善美は、寂しげな表情を浮かべながら、ガムを口に含む。

「が、り、」

美味しいとも美味いとも言えない。いつもの味、調整された原料の材料。

下手くそが作るほど、は、増なのだけれど、これではただの同じ物。

誰だって、完成度を観てしまうので在ろうな。

「魚鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼亞」

言葉を喋る。さじ加減を間違えたらしい。絶対的ダメージのある奇声を上げてしまった。

俺は、我が物顔でベンチを蹴る。

銀の吟味。パーフェクトエディソン（前書き）

とあり一角のメールの遣り取り、ギャルゲ式

銀の吟味。パーフェクトエディソン

作品名

『銀を吟味』

「暇か？アキラ」

ヨハネは、ばくにそんな事を言って、話しかけてきた。

自身…つまり、僕はアキラ

拙劣な名前だとは、昔から思っていた。親のセンスが解らない。この世に生を受け、一生縦掛けて生きていく記号なら。もっと、犯罪的は名前を付けても良いのに…世間のさざ波に弱い証か…

しかた在るまい。

「ああ、平凡な日常に暇してるぜ」

授業中だと言うのに、サイドからアタックを仕掛けるなんて…真面目な俺も運の尽きだな。

ノートにすらすらと、先生が教科書を模写する文字を写し書き、連ねるのは僕だ。

つまり、先生が黒板に文字を書くから、おれは一通り、ノートに写しているって事。お解り？

我に返って、ヨハネの反応を伺う。

「消しゴムを玄関に置いてきてしまった。貸してくれ…」

突っ込む、場所が限定されない。意味深なボケが炸裂した。

暇だから、消しゴムを借りるのか？コイツ？

それとも、消しゴムを玄関に置いてきてしまう要素を、ワザと分析させて、…「暇つぶしにでも成るだろ？考えて困惑して、困り果てて死ね」とでもなる裏の意味をハラんでいると言っのか？

コイツ…

1 ↑ せがむ

2 ↑ 惚れる

3 ↑ シカト

ここで3を選ぶ。

おれは、俺自身で主張するのを躊躇う部類だから、口にはしたくない。

愚かで賢くない訳ではなく。

賢さを評価したいわけでもない。

要するに、人並み。

なので、暇がどうか等の返事はしても暇つぶし等の話題には黙秘だ。

…

無言に、授業を受けるアキラ。皆はクソ真面目に授業など遣っていない。そして、おれには皆無関心。

皆出はないな一人例外が居るが、無言時間が過ぎれば、関心はしなくなる…。

ヨハネとは、一、二度学校などの行事で付き合いがあるだけで、それ以上関係は好めないし、好まない。

女学生多し、学園だ。交友関係も適度でなくては居ないと。腐った奴らに、クソビッチな物語を描かれたら困る…からな。

元女子高の空気は品があつて、心の中も貧で飢えている…。

信用でき…正しき、道を歩みたい僕だからこそ、勉学環境に適した校を選んだままで雑念なども煩惱などもない。

清き艶やかな日々を過ごしたまで…

その所為在ってか…友達は一人も居ませんがね。

「アキラは、シカトを続けるようなのですね…」

清楚なヨハネだが何かの餓えが見て取れる。

基本イヤツなんだが…その理由も兼ねていることも確か。

1 ↑シャーペンが折れる

2 ↑消しゴムが落ちる

3 ↑愛してるって抱きつく

ここで2を選ぶ。

ヨハネとおれアキラのちょうど、間を射抜くような感じで、消しゴムはピタリと止まったのだ。

この場面をなんて言おう？

非行中の不幸が重なり、ヨハネは

「あ、消しゴムがゴロリととてますぞよ?」

気持ち悪い語尾を追加し、気色悪い表現技法を使う。

あいつもあいつで、ひねくれている。

消しゴムをとって、俺に渡しさえすれば、この局面では何事もないのだがちょうど間と言う位置とさっきまで、『ぼくは消しゴムに飢えています。』みたいな発言をしてしまったために…

、ヨハネが消しゴムを触る・同時に・俺が言葉の凶器を使う、という式に、怯えてしまうのであろう。

例えば、こんな感じ←

ヨハネ「消しゴム拾ってあげるよ」

おれ「あ、こいつ消しゴム無いからって、ここぞとばかりに、俺の消しゴムを…滅びれ！氏ね！」

ヨハネ「しゅん←」

とりあえず、

おれの言葉を待っているのであろう椅子と机の間で右往左往している。

そんな、ヨハネの言動挙動を見て、
こんな悪口を思い出した。

原点越えて、沸点通り過ぎ、有頂天に辿り着いた際、天元突破して、
鼻血垂らして氏ね。

さて、どうするか？

1 ↑「別に、使いたかったら、使ってもいいよ」

2 ↑「さつさと、寄越せ。カス」

3 ↑「いや、自分で採るよ、大丈夫」

ここで2を選ぶ。

ここはお手柔らかに対応するべき判断、言葉は優しく丁寧に…でないと、シヨウハシ先生にこっぺきどく注意されて厄介だ。

1 ↑言葉を和らげる

2 ↑そのまま、行く。

ここで1を選ぶ。

目の前には死体が転がっていた、目の前だけではなく。あたり一面だ。

「また、やらかしたのかよ。」

俺は、ため息一つ吐くだけ。

当たり前のように、状況把握している。

フラグを間違えたのさ。この結果は見えていた。

先生は、喚き散らし。括っていた…吊されていた鋸でみんなを斬り殺したのだ。

消しゴムだけで世界がこんなに豹変してしまうとは、参ったものだ。

「神様は、何処へ行っても、ついてくる…」

仕方ないな。

そう思いながらも、かさばって遣りにくい屍立ちをのけ始める有様を睨すおれ。

「この世界を後は、どう生きよう…」

手遅れとなった世界で俺は、この世界でのみの有限たる時間をどう過ごすか…

「家に帰るか…」

1 ↑ 幼なじみの芋子の無事を確かめる。

2 ↑ 家で姉が待っている、帰れる。

3 ↑ヨハネを蘇生させる、

（死体がゴロリってか…、ここで1を選ぶ。

この世界では、消しゴムがトリガーだったらしいな…

そう言い切れるのは、消しゴムだけに鮮血が付着していないことから察しだ。

憶測…です。

まあ、おれ以外の人が死のうと其れは、定めや運命で仕方のないことと言えよう。

おれも一、プレイヤーとしてだ。

大抵は経験済み、…今で二、三回かな？

覚えて居ないな。過去の記憶。前世の記憶と言っても良い。そんな物がそう簡単に引き継げる物ではないし、少々受け継いだこのおれも奇跡の類だ。帰るとするか…

と、その前に、過去の記憶からの絶対的女神の生存を確かめるか…

彼女は何らかの形で、手助けしてくれるヘルプボタンだ。生きてくれると助かる。

芋山 芋子。

→

『とうや』と読むんだよな。変わっている、…

彼女は一つとなりのクラスに存在を潜伏させている。彼女の力は一般人には解らない。

とうや…即ち、芋子に会うべく。無生命体をどけるや退ける、その際、他人の血液は目障りなほど、どつぷり。

まどつている。

やっそこさで、外にでる、外と言っても廊下だ。

隣のクラスからは、普通の授業の音がする、

「まだ。授業中か…」

1 ↑いきなり、入る

2 ↑様子をうかがう

3 ↑様子をつかがうと背後から…

(ワクワクドキドキ、ここでもうを選ぶ。

銀の吟味。 2（前書き）

銀の吟味…略して、ギンギミ

銀の吟味。 2

恐る恐る、拝見より少しおびえた感じの挙動で教室をたしなめる…
おれ。

伺い様に、屈まる。

すると…

「一匹残っていたようだな。」

背後から、よく聞き慣れた、声よく通る先生らしい声が聞こえた。

くそ。背後かつ！

廊下に響き渡る間ではない。声のトーンで叫んでしまった。誇り
高きアキラにとっては、不覚。

的確に一般人と比を改めるのなら、静まり返った教室で女性声優さ
んの物までをするくらい辱め。

そんな事はいいのだ、今は現状把握が打つ手だ。それ以外はタワゴ
ト。

「殺してしまうもやぶさかではないが、ここは殺させて頂きますよ。」

廊下に響き渡るトーンで先生は言った。

予言していたがやっぱり、先生が…

アキラは、かがんだ状態から一度、うつ伏せになり、対改めなおした。

立ち所によると、一寸背後は、隣のクラスが健在していて、今もお授業が現在進行形で持続中。

（殺させてしまうのもやぶさかではないが…）の時点で隣のクラス略して、トナクラは何かの反応が在っても可笑しくないはずなのだが、この世界の理論上、狂気はバクに成るので、システム内でスル―されることが多い。

本当に不味いのは、先生がこちらを認知してしまったこと、トリガーと成る消しゴムは持ち合わせていない。所持していない。

辛うじて、先生はホウキの柄を持っているだけで、鋸なんかと言った極めて殺傷力の高い代物持っていないことが、不幸中の幸。

かと言って油断も出来ない。互いを相似、対象角で向かい合っているが距離は詰められ、四メートルほど、先ほどホウキの柄と言ったが楕円型に斜め切りされ、鋭く鋭利な凶器と変貌を遂げている。

一事が万事。この言葉の意味は知らないが、なんとなく言ってみただけの一言である。

時間も空間もない。

背後は、トナクラの住民。

前方は、竹槍使いの奇人。

どうする？

1 ↑喘ぎながら教室に逃げ込む。

2 ↑勇者を見習って、シャープで戦う。

3 ↑廊下の壁に設けられた掲示板を視察する。

4 ↑ヨハネの再臨。

（期待するあまりに、ここで4を選ぶ。

狂気が凶器を作り出すように、また、類は友を呼ぶので在ろう。

死ぬのは嫌いか？…と聞かれた時俺は真っ先に、死にたくはないし死ぬ勇氣もないと答える。

誰かに殺されるのは嫌か？…と聞かれたら、俺は迷わず、誰かが死ぬよりよっぽど増だと応える。

この場合の選択肢は、戦うが正しい。もし僕が主人公ならアッサリ勝ってしまうから…

主人公で無くとも、ここで死ぬまでの物でそれまでの物だったと勝手に解釈を付けて、勝手に逝ける。

基本、生きるも死ぬも難儀なことでは…

「無言とは、お前も頭が悪い。バカみたいに、騒いでうめいて、逃げれば良いのに…」

同情の勘違いにも程がある。過度な言い草だがおれは、あえて、行動をとらない。

期待して、期待されている人物が居るから…

「無言無口と挙動停止。確実につまらない習わしだとは思わないか？」

クルクル、と竹槍を右手から左手に…

揺さぶっても無駄、だってその言葉の言動から罠が零れ見えているから…

俺が何しようが勝手。このゲームにルールなど無いから、ゴール何て無いから…

俺は俺らしく振る舞うだけだ。

「死に様。腸引きずって肉片でも拝んでな」

すタッ

ヒンヤリと冷たいタイルを蹴る。これは視覚的な状態解析で実際に冷たいか、どうかなんて、分からない。

うつ伏せに成った時は、確かに冷たかったのは覚えて居る。

二メートルもない。先生との間隔。タイルを海と例えるのなら、海峡。

諦めを見せるのは、俺だけ。周りは…周囲は、タイル掲示板の張られた内壁天井の日本の蛍光灯の数々。

死ぬ際の走馬灯は、覚えて居ないな。そんなの知らない。

覚えて居ないなんてことは。過去の物だったから、

過去とは、過ぎたことになり、走馬灯は死を覚悟したこと示している。

死を覚悟した時は、刃渡り一メートル五十センチの竹槍が腹を捻るように錐揉みを行いように、食い込んだ瞬間を意味している。

僕は死ぬのか…

はっきり言おう。死人は生き返らない。

願ったとしても、それだ単なる願望で望まれない辻褄が合わない。

1 ↑目を瞑る

2 ↑諦めない

3 ↑諦める

4 ↑繰り返す

（はあ、ここで4を選ぶ。

そうだ、もう一度やり直そう。

アキラは又しても、死体の転がる教室で佇んでいるだけでした。

消しゴムがトリガーとしてもこんな使い方があったとは、
：

更新する際に当たったの記憶の保存と言うわけか。

この世界のルールが解ってきたかのように思えた。

「とりあえず、消しゴムを手に取りことにしたよ。」

消しゴムを採る際に当たったのヨハネの屍骸が横目で視界に入っ
たが、無視した。

期待しても、無理。この世界のルールがよく解る、死人は生き返ら
ない。

けれど、誰も気づかないとは可哀想。

けど、おれはしっかり覚えている多分忘れるまで覚えているつもりだ。

「さて、芋子の助案や助言でも、聞き入れるようか…」

錆び付いた手すりの様な物腰で老化に出た。

「…」

正しい俺が解らない。この世界に合った俺が必ずあるはず、そうすれば、厄介は訪れない。

頭をカキカキするふりをするアキラ。

「名前にヒントがあるのでは無かろうか？」

一世代前のマンガに出来そうなネーミング。おれはそんな名前をした人を見かけたり、死べったりしたことがない。自分を置いて…

道無き道を飛驒すら前に向かうだけの様。

何も案外が思いつかない。

とりあえず、さっきみたいに繰り返すだけでは前に進まない。五、六回くらいは腹にぼっかり、風穴が空いたからな…初めは痛かったけど、慣れれば問題ないし、もう慣れた自分が居て怖い。

兎に角、何かアクションを起こしたいも、トナクラまでの境目が分岐。

命の梁を抑える物が立ち位置だと誰が思うだろうか？おれは思ったが…

よく見てみれば、トナクラと俺たちクラスの境界には、クツキリ、空気の断片が見える。透明だが少し緑。

「なる程、これでは、とうやに会えないわけだ」

難易度を上げるべくよくある遮断線。

とうやとは、頼れる女神、芋子だ。

あいつは、普通の女の子だからな。最初主要人物と特定するのが難しいかったし、見つけるのも困難だった。

ふと、そんな感情がよぎる。これは記憶だ。

「授業が終わるまで、他を当たるか…」

断念した。

1 ↑ ナンパを仕掛ける

2 ↑ 中庭に座る創造主を貶す

3 ↑ 旧友の所へ

(紙現る、一二で2を選ぶ。

ギンギミッ

紙を一口で例えるならそれは白紙。

そして俺は、歩道橋と言われる学校の渡り廊下を闊歩している。

東側校舎には、行けないらしい。

行けない、ではないが行ったとして、歩いたとして、果たして、その生存率とやらを軽く見積もったところに未来はあるだろうか？

否に等しい回答しか出てこない。

何回か、中庭の空気を吸うべく。徘徊した際、何度か…竹槍に刺されたのである。

命曰く、消しゴムが幾つ在っても数に乏しい。そのくらい、誤って線を踏んでしまった。

線とは、空気の違う緑色をした空間の境界線のこと、踏めば竹槍が腸と臓物を貫通する。

言葉が誤ったがとりあえず、貫通するのだ。

先生は狂気だからな。

んと。違うな、場合によっては神出鬼没と紙神隠しと同型でいきなり現れ、いきなり殺すから…殺人鬼？に成るのか…

「どうでもいいことを、空想哲学するのは、この作者の習わしか…ピザパン喰いてえな…」

東側校舎にしか売店は存在しない。

創造主は、中庭にしか存在しない。

女神たる幼なじみは、隣のクラス。

知人だったはずのヨハネは死亡中。

お姉ちゃんは家で元気に料理実験。

この通り、俺はただ今徒歩をする。

明後日の方向には、売店の仄かな

香り。

「…！」

なぜか、なんだか、涙が出てきた。自我を制御していたつもりなのに、このざまか…

俺も無責任で無関心な奴だとは思っていたが、感情は在ったようだ…

「今すぐ、こんなシステムを作り上げた。創造主カッコオジサンを文殴りてえ、」

ぶん殴つても何も解決しないのが末。

それでも、全力で駆け出したのは青春を犠牲にされたような、逃げ場のなく出来ない感じを誇示した結果といってもいい。

不謹慎なじいさんだ。

挨拶代わりの…

1 ↑ 跳び蹴り

2 ↑ 頭を撫でる

3 ↑ 弁当を奪う

（ギャップを知るものは、全てを制す。ここで2を選ぶ。

おっさんの頭なんか撫でたって、何も起こりはしない。

得も無し、損もない。

けど、してしまえば、手が溶けてしまいそうな予感と悪寒しかし無いのは気の所為なのか？

この校は、五階立てが基本でおれら教室からは一つ階段を下りれば、すぐにでもグラウンドに駆け足体制をとれる構造…詰まり、おれら教室は、二階にあるって推理にたどり着く。

昔のおれらなそれは楽なことだ、宜しいことだと、身構え、心構えをしていたであろう…。しかし、

おっさんの頭部を撫でる前に一つ、試練が待ちかまえている。

それは確かなことで真実。

嘘は付いていない。

今日は運がいいことに、最悪だ。

「あ、アキラじゃん、どう？わたしの進めるニコニコ動画のあれ。視聴した？」

変な奴が目の前にいた。

「うるさい黙れ死ね。」

靴箱が並ぶ。玄関入り口の空間の備え付けのベンチから颯爽と、登場したらしく。やたらと粘着質な変な高校女子学生が露わとした。

名前は、確か…

「ひ、非道すぎますです、」

非道でいいや。

「悪いな、あいにく、ハーレムは望んでいないんだ。血みどろは、さつき体験したし…」

関わらないよう促す言葉たちと言うより、逆に興を引く言葉を出してしまった。

ささ、すすり足。

「待ってください。わたし、みたいなキャラは作者さん初めて描くので、もう少し、慣らしてください！」

コイツのテリトリーは、玄関の空間。もしくは、校門と裏門。

把握してしまっている俺が怖い。

てか、一日に必ず挨拶代わりのグミとキャンディー渡すから、怖い。この後も、キャンディーかグミを三体七で渡す。どっちか一つが彼女のポリシー。

「分かった。今お前、グミを渡そうとしただろ？見え見えだぞ」

これはまやかし、ごまかしとも言っつ。

「とりあえず、ニコニコ動画のあれ。観た？」

ごまかし返し、何を遣っているのであろっか…

「嗚呼、観たぞ。思う存分観た。見過ぎで鼻血が出た。もう、頭の中いっぱいいいっぱい」

下駄箱の角を虚ろな表情で棒読みするアキラ。

「観てない？観てないのね…」

残念そうな顔を見ると、幸せ！

「非道・子、そう嘆くなつて、明後日があるだろ？明後日が…で、グミくれ」

売店のピザパンの香りがおれのお腹の空腹を増大させ、食欲をそそる…今にも口からピザパンが出て来そうだ。

「ごめんなさい。二時限目の真っ直中で、取り上げされたの、グミだけ…」

グミだけ採られる器用さは、褒めてやろう。

1 ↑ほつといて、先を急ぐ

2 ↑もう少し、戯れる

3 ↑ヤバイ、お腹空いたよ。非道子！

4 ↑耳から、ピザ出てるぞ？

（ウホウホ、ここで4を選ぶ。

目を擦る。あまりの空腹で、幻覚でも観ているのではないのかと、確かめる意を表して技法だ。

再度着視する。

「？何パチクリしているの、まさか、ゴキブリでも顔面を這いずり回っている訳ではないでしょ？」

ピザがによきによき、目から離せない。

スゴいですよ。ピザがついに育成、養殖できる様になったんですよ。とは言えい。

「スゴいですよ。ピザがついに育成、養殖できる様になったんですよ。」

口から、出る文章。口語。

日本和動画協会を敵に回したくはないが…正直、伝えたのだから善意の習慣で許してくれるはず。

「何のネタ？わたしの脳内図書館には、その様なニュースを貯蓄していれる痕跡は見あたりませんが」

全く伝わっていない。全くこれだから日本文役に欠ける、低能女子

は…取って喰ってしまおうか？

「危ない！ピザに君が付いている！！」

ピザを地球人の魔の手から救うべく。非道子の耳元に襲いかかる。

おれはアキラだ。どうだ、キラキラしているだろ？

「きゃ！」

かわいい声を出すようだが、あいにく、作者さんの経験上そんな甲高い声を聞いたことがないから、クオリティも臨場感もまるで皆無だ。

おれはアキラだぞ。キラキラしているだろ？

凄く凄まじい顔をするのはアキラ。

目が血走り、ロバのような鼻息をするのはアキラ。

人間様に捕らわれの身のピザ姫を救出奪還するのはアキラ。

なんだろう…涙が出てきた…

アキラと非道子は激突し、かさばった。

固い玄関のタイルに後頭部から非道子は激突を予知する。

おれは咄嗟に、ピザを器用に顎でとらえ、引き抜く。首から上を横に振るような感じで捌く。

次いぞと言つては何だが、仕方なく非道子も助けることにした。

後頭部から行つてしまうと、女の子自慢の長く柔らかい髪がクッシヨンに成るうとも危ういと察したからである。

お姫様抱っこもお手の物。昔、お姉ちゃんが創造主と戦つてビルから墜ちた際に、その抱っこでキャッチして、巻き添え食つて死んだ記憶が蘇る。

嫌な物を思い出してしまった。本当に氏ねよ、非道子。

「はぁーはぁー」

一瞬の出来事で、一瞬の動作。例え特殊機動を覚えていたとしても、瞬間的にそれは運動量が桁違いだ。

あと、体育では評価が一である。しかも、十中。そして、十中八九おれはひ弱。

「息当たつてる。しかも、ピザの匂い」

どうやら、ピザは幻じゃなかったようだ。
ピザはくわえたままなので、この場合は、鼻息に該当するな。

「どうだ、立てるか？」

実際は、ピザくわえいるので、フヒフヒフフと聞こえる。

「大丈夫…だわ」

息、し辛そうにする俺を考えて、酸欠で倒れる前に、立ち上がる。
退ける。

「ごめんな、ピザがピザってピザなんだ」

ちよつと、放心状態な彼女に理解不可能な言語を連ねて魅せた。

「…」

「ピザ…遣るよ」

佇むばかりの非道子さんも可哀想だ。気を使ってピザを譲った。

「…」

「ちゃんと食えよ」

駆け出すのは青春空気のする野外。

そして、非道子さんは…

1 ↑ピザを食べた。

2 ↑ピザを捨てた。

3 ↑泣く。もしくは、喘ぐ。

(非道子に一票、ここですを選ぶ。

銀気味3

明後日の方向には、校舎の本体が帯びている。

明日の方向には、ベンチと中庭と中年なおっさんが見える。

「『恥ジラシキ、様子』」彼の名前だ。

本名か偽名かはさて置き、その語を発声すると、しっかり、反応してくれる。

瞬発力とか。反射神経とか。そんな物無いよう応答してくれる。

何、何回かは顔を見せている、大したことはない。彼方も俺を、知っている。

誤算かもしれないな、彼こそがおれを知らない。いちいち、作った物に名前や氏名や在り方や意義を後付けする意味もないのかも知れないな。

要は、作る物に意味がある。作った物に興味はない。

創造主はそんな奴。だから、恥ジラシキ、様子なのだ。

「よう、おっさん」

おっさんは、ヘルメットを被っていた。予知していたのではなく、彼にとっては偶々だという。

1 ↑これからの事を尋ねる。

2 ↑ヘルメットを退かす。

3 ↑相手は、非道子で恋愛相談。

ここで3を選ぶ。

「オレに何かようか？」

棒読みにも見える、口調。誰かに作られた人形のようにだ。

昔話を思い出した。

とうや某芋子が世界観を語らって居たような気がする。

暇を余した神は、手間を払って、世界を作った。

けれど、自分が楽しむために造ったはずの世界は、意識を持つ生物に願われたのだ。

もう一度、やり直したいと…

仕方なく、一人一匹一頭一輪を精密に、作ったのだ。

手間と引き換えに、感謝や卑屈を手に入れた。

それが目の前にいるおっさん。

「話が唐突だが…おれ好きな人が居るんだ。」

正直の言葉が何度でも使えるように、俺は正直に告げた。

隠す必要はない。何せ彼がこの世界を作った創造主だからだ。力の差が激しすぎるのは逆に、何でもない石ころのような存在。それが創造主及び『様子』。

名がややこしいのは、許しておくれ。

「なんだそうか成る程のう。」

弁当を加えながら、言葉を吐き捨てる。どこか寂しげなのは、弁当がたこ焼きサンドイッチ米弁当だからであろう。

決して、おれの話で感情を変化させない。それが様子の本来の様子。

「で？」

クソまずい弁当をよく金を払って購入するなと思いつつ、で？の言葉に驚愕を覚えるのもおれ。

創造主も若くなったものだ。

「だからさ、唐突過ぎて突拍子突かれ、理解でするのも解るけど、もう少し穏やかな言葉で、話してくれる？ヨウス」

一見二十歳に見えるのは、まやかしで、現実髪ボサボサのハゲで出っ歯で加齢臭臭いノーマンなおっさんだ。

「おれに何かようか？」

話を聞いていなかった。

上手い具合に鼻歌とおれの告げ口が妙に統合していただけた。

どうする…

1 ↑引き下がる

2 ↑悪戯する

3 ↑もう一度

4 ↑弁当付属の爪楊枝を奪う。

ここで4を選ぶ。

爪楊枝を上手い具合に、引っこ抜けばきつと、様子も悲しむ。

どうしてだろう？話は短刀、爪楊枝がないと歯と歯にサンドイッチした野菜がほじれないから…

私は、驚いた。爪楊枝がこうも容易く、取れるだなんて…

様子は嘆き哀しむばかり、私はただ、寂しく立つだけ。

ベンチからおっさんの嗚咽しか聞こえない。

私は私。彼に何も出来ない私。

「嗚呼、そうだ。弁当も食わせろ」

私は、おっさんの弁当を拝見しつつ、おっさんを弁当から退ける。

「上手そうな物は無さそうだ…」

このおっさん、私が弁当を奪うと解って、初発から美味しい物だけ喰っていたと、ふんだ。

胃袋に手でも突っ込まないと、美味しい物にありつけないらしい。

1 ↑おっさんの口の中に、手を挿入。

2 ↑悲しむ。おっさんに、弁当を食べさせる。

3 ↑非道・子との婚約。

4 ↑新キヤラ導入。

ここで4を選ぶ。

「何やってんのかしら？」

あ、野村か？

「今、このおっさんを詐欺罪でお訴えようとしていた所なんだ…」

嘘は付く、このタイミングで野村が現れて事は、授業終了の合図
つてと頃か。

彼女とは、入学初日に、スリ疑惑でおれを訴えようとした出会いが
ある。

記憶だけ、だけど。

この世界はいつ誕生したか解らない。記憶があっても、それは造ら
れただけの設定だと、おれは知っている。

そして、こいつは真人同様、バランスメーカー。こいつが歪みを守
勢してくれる。

「詐欺罪？…どう観ても、弱いものいじめにしか見えないのだけれ
ど、私の目もおかしいのかしら、」

ベンチから四メートル。俺から三メートル離れた位置から話す。
特に意味はない。

「嗚呼、これはチョコレート剥奪戦線途中だから、こうなった」

適当なことを返す。大丈夫、どんな歪んだ言葉を言っても野村は、修正を加えてくる。

「ああ、そう…所で授業はどうしたのかしら？」

血まみれなおれを観ても、指摘しないのは、彼女らしい。

「嗚呼、その事が、実はその事について、話したいかがある…」

情報収集といこうか。

「話したいこと…かしら？」

1 ↑ 屋上マシーン

2 ↑ 堕天使芋子

3 ↑ 地下裏組織

4 ↑ キラーマインド選別十団

ここで4を選ぶ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6881y/>

ダゲンブンゴ。

2011年12月1日14時51分発行